

## りびんぐらいぶず 平成31(2019)年2月第2号

### 浄土真宗の救い(聞名ループの救い)

#### ご讃題

五濁悪時悪世界 濁悪邪見(じょくあくじゃけん)の衆生には  
弥陀の名号あたへてぞ 恒沙の諸仏すすめたる。

(Ref『浄土和讃 弥陀経讃』「第八六首」註釈版 p571)

#### はじめに

布教使の勤めは、「宗教的眞実の世界」を日常生活で語ることである。必須の前提は、まず自らその世界を感得していなくてはならない。実践的・体験的にというのが極めて重要になる所以である。「日常生活で語る」とは、一般社会人と共通の接点をもつためである。

しかるに、浄土真宗では、こうした次元での教学展開の戦略的方向性が極めて弱い。第十七願の教学構造の理解に課題を残してきたことが災いし、布教伝道の実践面に支障を来しているからである。

三業惑乱後に正当視された「所行説」に基づくご常教では、法体名号の働きに委ねる余り、第十七願文の解明にメスを入れないまま、方便法身の働きの基づく教学構造理解が停滞して今日を迎えているからである。

そうした歴史的背景も手伝って、「自力排除」が極端化し「自力」は、「自助努力」と混同され、如来の一人働きの前では、何もしてはいけないというのが如く教学自体が萎縮してきたからである。浄土真宗のリスクの極致である。

#### 第十七願及び第十八願のお心

浄土真宗の救いは阿弥陀如来の名号を与えて救う救いである(ご讃題)。

ところが「名号の存在」を衆生は知らない。

なぜなら、衆生は、自らの胸底に宗教的要求が宿るというのに、精神集中を妨げるざわざわした日常生活の真っ只中にあるからである。

実は、諸仏如来(人間世界ではお釈迦様)が法蔵菩薩の本願を「物語り讃嘆」し、「称歎」してお名号の存在をお知らせ下さった。註「物語り讃嘆」とは、広讃、「称歎」とは略讃をいう。「略讃」とは、南無阿弥陀佛と称えること(大行)が仏をほめたてまつることになることをいう(Ref『銘文』註釈版 p655)である。

本願を物語り、南無阿弥陀佛と称歎してお聞かせに与ることにより、衆生は名号の存在を知り、微かに感動を覚えるようにできている。

初めての聞名が実現する有様である。

お釈迦様の称歎のお姿は、七高僧によって伝えられ、「妙好人」とも讃えられる他力の念仏

者を経て、私自身の今生のご縁を開いて下さった祖父母の姿を以て私に届けられていたのだった(Ref『歎異鈔第二条』註釈版聖典 p833)。

祖父母がお内仏様にぬかずいて念仏する姿を私は見たのである。そのとき、私は「名号讚嘆行」の働く有様を目の辺りにしたのだった。

すると衆生は、私もそうしてみたくなる。

その衆生の思いに応えるため、かねてのお手回しで如来様のお手許で仕上げられた南無阿彌陀佛と声に出して称える大行が衆生に本願力回向されてあったのだった。

「大行」とは何か。

「大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり」(「大行釈」註釈版 P141)。

如来様はその「大行」を私に与えて、「さあ、称えてご覧」とお勧めであったのだ。

このお勧めに対して衆生は、ただ「さようか」と頭を垂れて従うだけでよかったのだった。

「さようか」とは何か。

如来様が、清らかなお心からお手許で仕上げられ(至心)、間違いなく衆生にお与え下さるうとお手立て戴き(信樂)、わが懐に摂めとらずばおくまい(欲生我国)と施して下さったまことのお心の通りに、頭を垂れる姿だった。

このとき「さようか」と頭を垂れた姿、如来様のお勧めに委ねる心(Entrusting Mind)が浄土真宗の「信心」そのものだったのだ。

そこで、私には、お釈迦様のご案内下さった「南無阿彌陀佛と称えてお名号の功德をお称え申し上げる「称歎」のお姿に習い、お内仏様にぬかずいた祖父母の姿に習って(隨念して)お念仏したいと思うところが生じるのだった。

これは、日常生活が破られ、私の心のうちに芽生えた「わたしもそのようにしたいと思う心(乃至十念 Anusmareyus)」に他ならない。

それは、それまでお浄土について感心をもたず、それゆゑ浄土に生まれたいとも思わなかった衆生が、如来様の「欲生我国」のお心に習って「如来様の御言葉こそまこと、私もそのように思い採らせて戴きます」と衆生の心のうちに芽生えた心だったのある。尚、親鸞聖人は、「欲生我国」は今生では、「摂取不捨」に当たると仰せ下さって居る(Ref『愚禿鈔』註釈版 p539)。

心を静めて(止観の止)振り返るとき、私の心に芽生えるのは静かな第一の三昧(Meditation 瞑想)である。Anusmareyus の yus は、願望格であり、私の勝手な思いをうち捨てて(be disposed to(お任せして))諸仏の後に続く意である。この心は、藤田宏達先生の研究により Context(状況)としては声が出ている姿だと言われる。

また、「十念」の原意について梵本第十九願にお訊ねすると、「十たび心を起こす」の「起こす(pādāparivartaiḥ)」とは「回転する」だった。筆者にはこれは第十八願を第十七願に繋ぐ「聞名ループ」のループ概念を支えるものと窺われる。第十七願、第十八願は、成就文では一

聯に謳われているからである。

その心は、私も念仏してみたいと思い立った衆生は、いよいよ、自覚的に、聞名を目的とし念仏する段階に入る。第十七願のお心を顕す阿弥陀經の「執持名号」の梵語 *Manasikāra* は、聞思修の揃った、精神が活発に働く第二の三昧(止観の観)に該当するからである。

この三昧によって智慧が培われる(平成30年能仁正顕『般舟三昧経序説 p87』安居講義)。

阿弥陀經の「執持名号」は、浄土往生を願って行ずる念仏であると言われるが、既に第十八願の乃至十念を経たお念仏は、これに異なるものではないことは明らかである。

知識も表現力も要する本願の物語讃嘆、仏説無量寿経そのものを説く能力はなくとも、諸仏如来の称歎の後ろ姿に続いて、頭を垂れて南無阿弥陀佛と称歎することは、衆生にもできる。南無阿弥陀仏と称名念仏する姿は、衆生にも叶う「名号讃嘆の姿」に他ならなかったのだ。

こうして衆生の上には、本願力回向された大行を行ずる姿は、そのまま、名号讃嘆に他ならない讃仰の姿が恵まれるのだった。その目的は、実に「聞名」にあったのだ。

乃至十念で随念してお念仏してみたいと思う第一の三昧に始まり、「称歎」で聞思修を最高度に活発化して実践する名号讃嘆の讃仰の第二の三昧を通して聞名に与り、衆生は智慧を賜るのだった。

こうして本願力回向で賜った大行の実践を通して衆生には、とうとう「智慧の念仏」「信心の智慧」という境地を賜るのだった。合掌。

### 諸仏称名の願についての考察

三業惑乱では、第十八願の能行説に対せんとする余り、第十七願の所行(名号)こそ本行とする説を以て正当視するところに落ち着いたがこれは決して妥当な結論とは言えない。

「聞名」を目的とする意義を疎かにし、行信に焦点を当てる余り、第十七願の「咨嗟称我名」の主体に焦点を当てた論議が全く欠落していたからである。

名号讃嘆という行いの主体は諸仏如来である。行巻に「この行は「大悲の願(第十七願)より出たり」と「出体出願」されたのはこの意義であるかと窺われる。行巻の標挙に「諸仏称名の願」と謳われているからである。合掌。

(考察)智慧の念仏、信心の智慧を語ることによって初めてキリスト教、なかんずくプロテスタントとの違いを鮮明にできるかと窺う。信一念義の時間論の観点については、聞名ループは論理的順序であり時間的前後はないのだと説明すればよいかと窺う。合掌。

仏教壮年会お聴聞の会 二月三日(日)二十時、

仏教婦人会例会 二月十六日(土)十九時半、

永代経 三月二日(土)十三時半 お客僧 本願寺派布教使 田淵幸響師

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥